九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

バングラデシュ農村部における女性の生活に対するマイクロクレジットの影響に関する研究

筒井，康美
九州大学大学院芸術工学府

谷，正和
九州大学大学院芸術工学研究院環境計画部門

https://doi.org/10.15017/2794892

出版情報：芸術工学研究. 6, pp.21-29, 2006-12-20. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

研究論文

バングラデシュ農村部における女性の生活に対するマイクロクレジットの影響に関する研究

The study of the influence of micro-credit loans on women's life in rural Bangladesh

筒井康美 *、谷正和 **
TSUTSUI Yasumi and TANI Masakazu

Abstract

This article analyzes how micro-credit influences women's life in rural Bangladesh. Micro-credit is important capital for increasing family income. Micro-credit is generally known as such not only that it helps the borrowers economically, but also the women's status and conditions in their families.

However, our research shows that women who take loans from Grameen Bank did not make remarkable economical changes. But some of borrowers did not care about very much the function of loaned money for generating income. They expect that loaned money change somehow their lives, such as improving their status and condition in their families. It is also important that borrowers get more opportunities to receive medical care and express their opinion for buying goods for them, such as clothes and ornaments. In addition, loaned money makes feel easy in their family because they contribute to getting fund into household. Sometimes borrowers keep loaned money for household emergency because their husbands' income is unstable.

Therefore, this paper argues that since there are other functions than providing capital, micro-credit works for improving women's lives even when micro-credit does not improve household economy.

1．はじめに

この研究はバングラデシュのある農村で生活する女性を対象にして、マイクロクレジットの融資による女性の生活への影響を具体的な文脈に沿って民族誌的調査で明らかにしようとするものである。

これまでに行われてきた研究成果によると、融資を受けた女性が事業などを行い経済的に自立したり家庭の収入増加に貢献することによって、融資は女性を取り巻く環境にも影響を与えることがあきらかになった。同時にバングラデシュ農村の現状では、融資は名義人である女性本人によっては使用されておらず、実際は男性親族によってコントロールされる可能性が大きいことも指摘されている。したがって本研究の調査では、女性が名義となって獲得した融資を男性が管理運用している事例を対象とし、この場合、女性が融資からどのような影響を受けているかを明らかにした。その結果、農村社会では融資を受け資金を獲得することそれ自体に大きな意味があり、融資を運用する人物や収入の増減にかかわらず、融資を受けることは家庭内での女性の立場に影響を与えることがわかった。その資金が男性によって管理されているにも拘らず、女性が自らの名義で融資を獲得したことは女性の人生における転換期として記憶されており、女性のライフヒストリーのなかで「それまでの暮らしを変える出来事」として印象づけられていた。

以下では、まず第2節でマイクロクレジットの制度についてその概略を記述し、これまでのマイクロクレジットをめぐる論議をまとめる。調査方法を第3節で説明し、その結果を第4節で (1) 規範的なマイクロクレジットと調査対象村での実情の比較分析、(2) 女性の生活への影

*九州大学大学院　芸術工学府　博士後期課程
**九州大学大学院　芸術工学研究院　助教授

響、(3) 債務者女性による主観評価に分けて分析する。第5節では、この分析結果に基づき、この論文の課題であるマイクロクレジットの女性の生活に対する影響を、融資を獲得することが女性にとってどのような意味をもつのかという視点で考察し、最終節でその考察についての評価と結果の意味をまとめるものとする。

2．マイクロクレジットをめぐる論議

1970年代、バングラデシュの経済学者M．ユヌスは農村に暮らす女性たちと話したことをきっかけに、農村の女性たちは商売の元手とするための小さな金額の融資を必要としていることを知った。そこで彼は実験的に農村の女性に対して日本円にして千円にも満たない小さな額の融資を始めた。この融資方法はその融資金額の小額さから「マイクロクレジット」(非常に小さな融資)と呼ばれるようになり、のちにM．ユヌスがグラミン銀行を設立し融資方法として確立する。2006年6月現在におけるグラミン銀行の債務者数は639万人、その96%が女性、そして98%という高い返済率を誇る(Yunus 2006)。

債務者の96%が女性という数値に示されるように、グラミン銀行は主に女性を対象とした融資を行っている。M．ユヌスが融資対象を女性にこだわることには理由がある。マイクロクレジットの試行段階で彼は、男性に比べると女性のほうが家庭全体のために資金を有効に使おうとする傾向が強く、女性に融資すれば家族の栄養状態や子供の健康状態などの改善が早く家庭全体が融資から利益を得ることを発見した(ユヌス　1998)。このことから、M．ユヌスは農村の貧困を解決するには女性に融資をすることがもっとも効率的だと考えており、女性を対象とした融資が行われるようになった。

このような理念のもと農村女性が融資をうけるようになると、事業を行い資産を増やすなど経済的に大きな利益を得る者も現れるようになり、マイクロクレジットの「成功例」が各地で報告されるようになった(Farashuddin et al. 1998, Hashemi et al. 1996a, Hosssain et al. 1998, 日本リザルツ 1997)。

女性が融資を獲得したことで経済的な利益を家庭にもたらすようになると、家庭内における女性の地位が確立され、さまざまな変化が報告された。そのようなものの一つとして、女性に対する融資は家庭内暴力に変化を与えたとされる(Farashuddin et al. 1998, Hashemi et al. 1996a, Hossain et al. 1998, 有川　2001)。バングラデシュ農村において家庭内暴力は広範囲にわたってみられる深刻な問題であるが(Koening et al. 2003)、マイクロクレジット形式の融資を受けている女性は、融資を受けていない女性と比べると夫からの暴力が減少したことが報告されている(Hashemi et al. 1996b, Kabeer 2001)。

マイクロクレジットの存在は、農村の生活において女性が文化的・社会的に受けている制約に対しても影響を与えた。その一つに女性のアイデンティティに関する変化を挙げることができる。マイクロクレジット・プログラムによって他の女性たちと交流を持つようになったことを契機に自信、自尊心を高める女性も現れるようになった(Hashemi et al. 1996a)。家庭における立場が改善したことから、男性親族の許しを請わずに買い物に行けるようになる、行動やその範囲について家族からの干渉が減るなどして女性の行動範囲が広がる場合もある(Hashemi et al. 1996a, Hossain et al. 1998)。買い物の際、家庭の支出に関して意見を言えるようになる、または自分の欲しいものを購入できるようになるとする報告もある(Hashemi et al 1996a)。

融資を用いることにより事業を興すなど新たな活動を始めるようになる場合は、法律に関する知識を得るようになったり、団結して政治的な行動を起こすようになるという。経済的にも精神的にも自立するようになった女性がそのような経緯で社会的・政治的な知識を獲得し、行動を取るようになるという効果も報告されている(Farashuddin et al. 1998, Hashemi et al. 1996a)。

一方で、バングラデシュ農村では慣習的に現金は男性が扱うものとされており、実際には融資を受けている女性の夫など男性親族によって資金がコントロールされている場合は少なくないことが報告された(Goetz and Gupta 1994, Rahman 1999, Kabeer 2001)。これらの研究において「資金を借りる窓口」になっただけでは女性の地位には影響を与えていないこともあわせて指摘された。

融資を管理する人物が、女性本人であっても、男性親族であっても、女性の地位に対する影響はあるとする指摘もある。女性が資金を獲得するリソースだと認識されたことにより、たとえ男性が融資をコントロールしても女性の地位が上昇することがある([Rahman 1986] Goetz and Gupta 1996)。この事例研究では、借りた融資のすべてを男性に渡した女性たちのほうが、男性債務者の妻よりも栄養面でよい状態にあり、衣類や医療の

消費においてより多く出費していることが報告されている。またGoetz and Gupta (1994) によると、女性は融資の管理権を放棄し男性に任せる見返りとして、結果的には自分と子供の被服費と医療費に関してより多くの出費をできるようになると解釈されている。

以上、これまで概観したように、女性が融資を直接管理し収益を上げた場合に女性が受ける影響についてはさまざまな視点に基づく研究蓄積がある。一方、融資が男性によって管理されている場合でも家庭内における女性の地位が変化するとする指摘もある。このような、女性が家計経済に対して具体的に貢献していないにも関わらず融資を獲得するリソースとなったことで女性の地位が影響を受ける理由については、明らかにされていない。そこで本研究では、融資を男性がコントロールしている条件下における女性を取り巻く環境の変化に着目し、そのような変化が起こる理由について考察するものとする。

3. 調査方法

以上、マイクロクレジットが女性の生活に与える影響について概観してきたが、成功例でも問題指摘でも特定の事例のみによるものが多く、マイクロクレジットを利用している女性の全体的な傾向をつかむことが難しい。そのため、本稿における調査ではまずある村の全世帯を対象にした世帯調査に基づき、その村の中でマイクロクレジット活動している女性の全員を確認した。調査地はバングラデシュ・ジェソール県に位置するM村である。村は2つの集落からなり、村内の総世帯数は626世帯、農業を主な生業とする村である。

M村の平均年収は27,390タカ[1]、最高が405,000タカ、最低は0タカであった。収入が15,000タカ以下の世帯は327世帯あり、これは全世帯数のおよそ半数にあたる。したがって27,390タカという世帯収入平均はいくつかの高収入世帯によって引き上げられたものであり、村にはある程度の経済格差がある。

M村にはマイクロクレジット形式の融資を提供する5つの機関が出入りしている。この5つの機関のどれかから融資を受けている女性は131名、同一世帯で2名以上が融資を受けている例はないので、M村の全世帯の約2割にあたる世帯がマイクロクレジット活動をしていることになる（筒井　2003）。

この131名のうちグラミン銀行から融資を受けているのは57名である。融資を受けることの経年変化を追うため、1992年にグラミン銀行が融資を開始した集落を調査対象とした。この集落において調査時点で融資を受けている女性は27名であった。調査の予備段階で確認したところ、この27名は全員が融資を夫や息子など世帯に属する男性の収入によって返済しており、融資の管理は事実上男性によって行われていた。債務者によっては融資を借りる名義人であるにすぎず、借りている融資の金額や融資で購入したものを「知らない」、「夫に聞かなければわからない」と答える債務者もいた。

調査の手順は以下のとおりである。まず融資をどのように活用しているのかを知るため、融資を受けるようになった目的、返済方法、融資を使って購入したものについて調査・記録した。

次に融資による経済的効果と、女性が融資によってどのような影響を受けているかという2点を探るため、融資を受けている27名と世帯構成と収入が類似しており、かつマイクロクレジット形式の融資を一切受けたことのない女性を別に27名選び比較調査を行なった。ここで聞き取った項目は、経済的な側面については各家庭の支出と財産の獲得状況、女性への影響に関する側面については、女性による現金収入活動の状況、家庭内での発言権、行動範囲、である。

続いて融資を受ける前と受けるようになった後で、どのような生活上の変化があったのかを焦点とした聞き取り調査を行った。この聞き取りでは融資を受けている女性と個別に対面し、マイクロクレジットを得たことによる彼女の体験に基づくライフヒストリーの記録を行った。

4. 分析結果

4.1. 資金の使用

調査対象とした27名の融資を調査当時において借りている年数と金額を表1に示す。M村においてグラミン銀行の融資活動が始まったのは1992年であり、調査時の2002年まで継続して融資を受けている債務者は最長で10年間融資を受けていることになる。特徴的なことは、1992年に融資がはじまった当初から10年間に渡り融資を受け続けている債務者は15名であり、対象とした27名のうちの半数を超えることである。また融資を継続して受けている年数が7年目になるという1名を除くと、融資の継続年数が6～9年目に相当する回答者はいない。このことから、債務者には有効性を評価し継続して融資を受ける人と、借入年数が短く融資の試行段階

にある人の二つの傾向がある。

融資の借入金額は、3,000タカから15,000タカに及ぶ。M村においてグラミン銀行から融資を受ける場合、融資額は3,000タカからはじまり、延滞なく返済することができれば翌年度はより高い金額の融資を受けることができる。融資の継続年数が増えるにしたがって融資金額もおおむね増える傾向にあることは表1からわかる。例外は融資継続年数を10年目とする15名の回答者である。借入金額が不明であった4名を除くと、借入金額が3,000～5,000タカのグループ（5名が該当）と8,000～15,000タカのグループ（6名）の二つに分けることができる。つまり、10年間の間に順調に融資を活用し融資金額を増やしたグループと、融資の延滞をスムーズに行えず融資額が低額にとどまるグループがあると考えることができる。

表1　融資継続年数と借入金額（2002年現在）

	融資継続年数（年）							
金額（Tk）	1	2	3	4	5	7	10	総計
3,000	1				1		2	4
4,000	1	2					1	4
5,000			1	1			2	4
6,000					1			1
7,000			1		1			2
8,000							2	2
11,000							2	2
14,000							1	1
15,000							1	1
不明				1		1	4	6
総計	2	2	2	2	3	1	15	27

グラミン銀行の村内業務は女性の啓蒙や投資相談を含むきめの細かいもの（ユヌス　1998）と言われているのに対し、M村の活動状況は異なっていた。グラミン銀行員は週に一度M村にやってきて、返済金を回収しては去っていくだけであった。このように、少なくともM村では貸し手であるグラミン銀行側から女性に対して資産を増加させるための指導や管理が行われているわけではない。そのためか全般的に融資は日常の生活資金としても使われており、マイクロクレジットの運用によって就業形態や生活が大きく変化する例は見られなかった。

グラミン銀行の規則では、融資金が借主である女性以外の人物によって管理・運用されることを禁止している。しかし、現実は、この村でもそうであるように、バングラデシュ農村においては銀行側が禁止しても資金は男性によって運用される傾向が非常に強い(Goetz and Gupta 1996)。

その背景としては、バングラデシュ農村におけるパルダを挙げることができる。パルダとはもともとヒンディ語やウルドゥ語で「カーテン」を意味し、女性が全身を衣服で覆う行為や、一定の範囲内で日常生活を送るという行為によって見知らぬ男性の視線を遮断し接触を防ぐという慣習をさす（Mandelbaum 1988）。パルダにより自宅から遠く離れる外出は禁止されており、女性たちは日常生活の大半を自宅の敷地内で過ごしている。

パルダを守ろうとすれば女性は資源や市場へのアクセスが限定的なものとなるが、一方で男性にとっては容易である。このような条件のもと融資を有効に活用しようとする目的から女性が男性に融資を渡してしまうことがあり、結果的に融資は男性によって運用される傾向が強いとする指摘もある（Tassel 2003）。

以上のように、融資を得ても女性自身が自由に商売や投資活動を行うことは事実上不可能であり、資金は男性によって管理運用されるようになる。さらに村では慣習的に現金は男性が管理するものとされている。したがって、女性の行動を規制するパルダと、女性を現金から隔離する慣習の影響により、M村の状況において銀行員のアドバイスや協力なしでは女性が主体となって資金を管理運用することは難しい。

それでは、融資を受けている女性がそれを元手に全く経済活動を行なっていないかというと、そうではない。実際には融資を受けている女性は、融資を受けていない女性と比較してみるといくつかの点で違いがある。

融資を受けている女性が行っている経済活動の数と、融資を受けていない女性が行っている経済活動の数を比較すると、両者の間に違いが見られた。上述のようにバングラデシュ農村ではパルダの影響もあり、M村において公の場で職業につく女性はいない。しかし、家の敷地内において売却用に家畜を育てる、「ノクシ・カンタ」と呼ばれる伝統工芸の刺繍製品を製作するなどして収入を得る女性は多い。融資を受けている27名と、受けていない27名を対象にこなしている現金収入活動の数について比較すると、融資を受けている女性の行っている経済活動数の合計は73、融資を受けていない女性では合計38と、約2倍の差があることがわかった。図1はそのような活動のうちわけをカテゴリー別に分け示したものである。

図1に示されているように融資を受けていない女性に比べて、受けている女性が多く従事している活動は家畜や畜産物の販売である。原資は特定できないが、これらの家畜を買う資金に対して融資の一部が回されていると

判断できる。融資受ける前の収入が分からないのでこのようないわば家内事業による収入増は計算できないものの、下に述べるように支出額の平均が融資を受けた世帯のほうが高いことから、ある程度の収入増につながっていることが類推できる。女性はこれらの職業によって得た収入をさまざまな家庭内の出費に使う。融資を受けている女性はこなしている職種が多い分、収入を得る機会も多く、自分の裁量で子供に何か買い与えたり、衣料品など自分に必要なものを自由に購入したりする機会が多いという。

年間を通しての支出総額は、融資を受けていない世帯では9,397タカ、融資を受けている世帯では12,250タカであり、融資を受けている世帯のほうが年間の支出額が多いことがわかった（表2）。個人別の年間支出を見てみると、世帯主とその妻に関する支出は融資を受けている世帯と受けていない世帯であまり違わず、大きく違いが生じている箇所は子供に関する支出であった。融資を受けている世帯では子供の教育費が1,712タカなのに対し、受けていない世帯では1,080タカである。また子供の医療費は融資を受けている世帯では2,865タカ、受けていない世帯では1,054タカと約3倍の違いがある。

そのほか融資を受けている世帯と受けていない世帯で異なっているのは、小規模農地の購入状況である。表3は融資を受けている世帯と受けていない世帯が調査時までに購入した財産を表すものである。住居の購入や改修については融資を受けている世帯と受けていない世帯で大差はない。大きく異なるのは小規模農地の購入である。融資を受けていない世帯で最近農地を購入した世帯は1件のみだが、融資を受けている世帯では14件にものぼる。このうち4件の回答者が購入した土地の面積と金額について覚えていた。彼らの購入面積、購入金額は似通っており、いずれも土地の面積は小規模で4～5カタ（4カタ＝約100坪）であり、金額は3,000～5,000タカの範囲内であった。

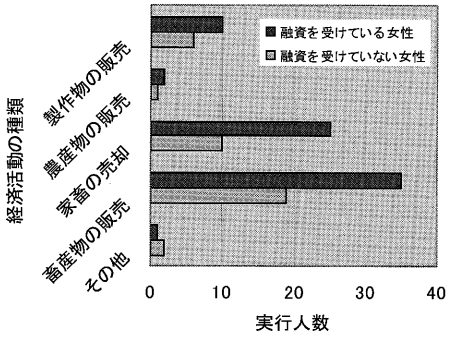

図1　女性が行っている職業（複数回答）

農地は農業集落にあっては重要な生産手段であるので、融資側の規範的想定とは異なるものの、M村においてはマイクロクレジットを利用した積極的投資であるといえる。

4.2　女性への影響

表2　家族の出費　（一人平均、単位：Tk、期間：年）

		被服	医療	教育	その他	合計
世帯主	非ローン世帯	1,237	778	—	1,348	2,161
	ローン世帯	1,346	1,192	—	1,348	2,261
妻	非ローン世帯	1,538	780	—	90	2,408
	ローン世帯	1,405	1,130	—	81	2,668
子供	非ローン世帯	1,980	1,054	1,080	1,526	4,016
	ローン世帯	2,112	2,866	1,712	277	6,743
合計	非ローン世帯	4,983	3,000	1,080	1,351	9,397
	ローン世帯	5,804	4,048	1,712	574	12,250

注1）表中では、融資を受けていない世帯を「非ローン世帯」、融資を受けている世帯を「ローン世帯」と表す。
注2）表中の金額は非ローン世帯、ローン世帯合計それぞれの平均値。小数点第1位を四捨五入。

表3　2002年夏までに世帯で購入した財産

	住居	住居の改修	農地	その他
非ローン世帯	7	3	1	3
ローン世帯	5	1	14	7

次に、M村では融資を得たことによって女性の生活がどのように変化したのかという点を分析する。ここで注目するのは、女性の家庭内での発言権と行動範囲である。

まず行動範囲に関しては、今回の聞き取りの結果では融資を受けている女性も、受けていない女性もその日常的な行動範囲は、バリ内と近所の世帯や、日用品を売っている近所の小店までをその限界とする。バリとはバングラデシュ農村における居住単位のことである。バリ（またはバリ・ビティ）とはベンガル語で「屋敷地」を意味する。バリは母屋、調理小屋、家畜小屋、物置等の建物によって構成され、それぞれの建物が中庭を囲むように建てられ、ひとつの閉じられた生活空間を形成している（吉野　1995）。バリ内は女性が自由に行動できる空間であり、ここで農作業や家畜の世話を行っている。このバリ内と近所までを限界とする日常的な行動範囲については、融資を受けている女性と受けていない女性で大きな差はなかった。また、女性がバリを出て遠くへ出かけていく機会は、冠婚葬祭など親戚にかかわる行事の場合に限られる。どこまで遠くまで出かけたことがあるかという経験はその女性の親戚がどこに住んでいるかのみに関係しており、融資を受けている・いないということから影響を受けてはいない。

次に女性たちの家庭内での発言力を知るために、配偶者と意見が対立した場合についてその対処の仕方を聞いた。女性たちの多くが夫と口論になった場合、最終的には女性が譲歩していた。その結果を不服とする場合、彼女たちの反応はさまざまだが、「数日間、夫と話さない」、「実家に帰る」という対抗的な反応もあれば、「(自分が)数日間何も食べない」という反応もある。ここでも、融資を受けている女性グループが特に夫との口論で強い主張をするようになった例はない。

しかし詳しく話を聞いてみると、家庭のなかに融資が入り込んでくるようになった結果、女性たちはさまざまな変化を体験し、そのような変化をマイクロクレジットによるものと認識していることがわかった。融資を受けている女性たちが認識している変化は、彼女たちの生活に根付いた、身近な変化であった。

そのような変化の一つとして、融資を受けることによって女性たちは出費の際に自分の意見が受け入れられるという経験をしている。たとえば、衣料品の購入時に女性の好みを夫が聞き入れて買ってくれるようになった、という変化がある。パルダにより、多くの女性は買い物に出かけて行くことができない。このため食材など日常的な買い物から、女性の服や貴金属といった年に何度かの買い物に至るまで、すべての買い物を男性が行っている。したがって多くの女性は服などの購入時に色や柄などについて自分の好きなものを選ぶ機会はなく、男性が買ってきたものをただ受け入れている場合が多い。しかし融資を受けるようになってからは、自分がどんな服がほしいかを夫が聞き入れてくれるようになり、それに合ったものを買ってきてくれるようになったという意見が聞かれた。中には近所の町まで買いに出かけることを許してくれるようになったという女性もいた。

現段階では、融資を受けている女性たちは男性親族との口論で意見を通すほど強い発言権を得ているわけではないが、買い物において自分の好みを聞き入れられるという発言権を手にする場合があるということである。

医療面で変化を経験するという場合もある。融資を受けるようになってからの変化として、夫が医者を前よりも呼んでくれるようになったという事例があった。服の購入と同様パルダの影響により、女性は病気の時といえども自らの意思と希望で出かけていって医者の診察を受けることや、薬を買いに行くことができない。通常、女性が体調を崩した場合は夫などの男性親族が医者を呼びに行き、自宅で診察を受けることが多い。また、その際に処方された薬を買いに行くのも男性であり、女性がどの程度医療を受けることができるかはその世帯の男性の判断によって決まる。このため、病気になったとき融資を受ける前と比べて夫が医者を呼ぶようになったということは、女性の家庭内での地位の向上を示しているといえる。

4.3 融資の効果に対する主観的評価

女性が体験した変化は、発言権や行動範囲などの行動に関する変化に限らず、融資によって気の持ちようが変わるという心理的な変化もある。そのような変化を知るために三名の女性からグラミン銀行の融資を受ける前とその後での変化について詳しい聞き取りを行った。

女性Aは融資という安定した財源を手にしたおかげで子供を学校に行かせることができるようになったという。子供を学校に通わせるということには、親の期待や将来に対する安心感など多くの要素が含まれている。彼女の夫は農業日雇い労働者をしており、収入は時期により不安定であった。子供を学校に行かせることは一年を通して定期的に現金が必要になることを意味しており、子供を学校に行かせるという決断をすることに以前は非常にためらいがあったと言う。この点、融資は確実な資金源であるため、融資の存在によって収入が不安定であることを心配することなく学校に行かせることができるようになったと述べている。

女性Bは融資による影響として、家庭内における自分の立場の変化を強調した。彼女とその夫は非常に貧しく、以前は夫の両親に借金して生活をやりくりしていた。バングラデシュ農村において一般的に嫁の立場は非常に弱く、両親に借金がある嫁という彼女の立場はさらに悪い状況であったという。借金がある後ろめたさから両親の命令に従わなければならないこともあり、そのような暮らしは彼女にとって大きな苦痛であった。しかしグラミン銀行から融資を受けるようになってからは、両親からの借金に依存する必要がなくなり、彼女の立場は改善したと感じている。さらに、融資の効果を認めた義母もマイクロクレジットを始めるようになった。役に立つ融資を家族に紹介したということで、彼女は家族からある種の敬意を受けるようになり、融資によって自分の立場はまったく違ったものになったという。

女性Cは生活のすべてを夫の収入に依存しているという立場であるため、夫に対して絶対服従であった。この女性の夫は農業日雇い労働者であり、収入は不安定で

あった。融資を受けるようになったからといって、彼女と夫の関係が変化したわけではなく、夫に対する服従は続いた。しかし、融資を受けることで彼女にも家計のために調達できる資金ができ、彼女は気分的に楽になったという。彼女はマイクロクレジットの融資に対して、その存在が家計への緊張感をやわらげる機能を評価している。

彼女たちがマイクロクレジットを得たことによって評価することがらは収入の増加そのものではなく、まとまった額の資金を家庭の外部から得たことによって起こった変化であるといえる。

5. 考察

これまで言われているように、M村の分析でもマイクロクレジットにはある一定の経済的効果に加えて、女性の生活への波及効果を認めることができる。融資を受けているグループとそうでないグループを比較すると、子供に関する出費や財産の獲得状況に違いがみられ、融資は具体的に家計に影響を及ぼしていた。効果はこれにとどまらず、融資の窓口となったことで女性を取り巻く身近なことがらに変化が見られた。たとえば、服の好みを聞き入れられるようになる・医療を受ける機会が増えるといった変化を、融資に付随する効果として女性たちは認識していた。

一方、女性のライフヒストリーのなかでマイクロクレジットを獲得したという出来事をとらえると、融資はまた別の意義を持っていた。女性の語りからわかることは、女性たちがマイクロクレジットの獲得を「それまでの暮らしを変える出来事」であったと強く意識していることである。そのように変わる契機となった要因として重視されたことは、収入を増やす手段としての価値や女性に関する諸問題を改善する機能ではなく、家庭の外部からまとまった額の資金を獲得したことにあった。女性がまとまった資金を獲得したことの意義は、かつて資金を準備することができないために彼女たちがどんなことに悩み苦しんでいたのかという語りから、その過去と現在を比較することで浮き彫りとなった。

融資は収入や財産を増やすための手段であり、本来であればその効果を発揮できてこそ評価されるものであろう。しかし、M村の女性の語りにみられるように「資金を獲得すること自体」が評価される理由は、農村社会において資金を調達することや、予期せぬ出費に備えるだけの資金を保持しておくことの難しさと関係があるのではないかと考えられる。そこで、外部から資金を獲得することと、まとまった額の資金を保持することが農村社会ではどのような意味を持つのか、M村の状況をふまえて以下で考察する。

まず、M村社会において家庭の外部から資金を獲得することについて。バングラデシュ農村においてマイクロクレジットが登場するまで女性に対する融資は存在しなかったものの、男性は銀行から融資を受けることが可能である。この通常の銀行融資はさまざまな面で女性が受けているマイクロクレジット形式の融資よりも返済が簡単である。マイクロクレジット形式の融資は毎週返済しなければならないのに対して通常の融資は1年単位での返済であり、利率も低い。従来からの融資がマイクロクレジット形式の融資と決定的に異なる点は、担保として土地を必要とすることである。

M村において、マイクロクレジット形式の融資を受けている世帯は土地を所有していない場合が多い。M村では131世帯がグラミン銀行を含むなんらかの機関からマイクロクレジット式融資を受けており、このうち土地を持たない世帯は約6割（81世帯）を占める。一方、マイクロクレジット形式の融資を受けていない世帯495世帯のうちで土地を持たない世帯は約3割（169世帯）にすぎない。したがって、マイクロクレジット形式の融資を受けている世帯の多くは、土地を所有しないために従来型の融資を受けられない状況にある。

農村社会において土地を所有しないことは、財産を持たないことと同時に生産手段を持たないことを意味する。このため、土地を所有しない世帯の多くは農業日雇い労働者として生計をたてている。M村における日雇い労働者の労働機会は不安定で、ある日に雇われるかどうかはその日の朝にならなければ決まらない。その上農繁期と農閑期では収入が大きく変動する。日雇い労働者世帯の収入状況は不安定であり、収入の乏しい時期に病気など急な出費が必要となる場合は大きな衝撃を受けることになる。

土地所有の有無や不安定な収入源は家庭全体に影響する問題であり、女性だけの問題ではない。しかし、Kabeer（2001）はバングラデシュ農村では家計の窮状によって特に負の影響を受けるのは女性であることを報告している。彼女は生活資金が欠乏すると女性に対する男性の態度の寛容さが減少し、女性は暴力などの緊張状態にさらされる機会が増えることを調査事例で紹介している。生活資金の欠乏に伴い自らの存在が緊張状態にさ

らされるとすれば、家庭に余剰となる資金があるかどうかは女性に大きく影響を与えるものとなる。

以上のように、マイクロクレジットを得ている世帯は不安定な生計の上に成り立っており、それゆえに女性の置かれた立場も不安定である。担保となる土地を所有していないため、マイクロクレジット以外の方法でまとまった資金を獲得する手段もない。したがって、土地を所有しない世帯にとって、マイクロクレジットは予期せぬ事態に備えるための数少ない手段なのである。

忘れてはならないのは、融資を受けることには大きなリスクを伴うということである。グラミン銀行による融資の利子は年利20%であり、融資を受ければ経済的に大きな負担を抱え込むことになる。また毎週ごとに返済金を家計から捻出することは、収入の不安定な世帯にとって容易なことではない。事実、聞き取り調査を進めるなかで、利子の高さと返済の困難さに耐えられずマイクロクレジットをやめた事例や、膨大な借金を抱え込み都会に出稼ぎに行ったという事例に遭遇した。さらに貸付機関による取り立ては容赦のないもので、M村の女性のなかにはこれらの機関を恐れる人もいる。隣人の失敗や取り立ての壮絶さは日常生活のなかで目にする光景であり、マイクロクレジット形式の融資を受けるリスクはM村でも十分に認識されている。

融資を得ることで大きな事業を始め十分な利益を得る場合には、リスクをとることに納得できる。しかし家畜の育成を除いてそのような事業展開が見られないM村では、この説明は適用できない。一方、返済の重圧は等しく全ての世帯にのしかかっている。M村の事例において、利子の高さと自転車操業的な返済状況を考慮すると、現在融資を受けている世帯が一転してマイクロクレジットをやめる・経済的破綻に追い込まれるといった可能性は大きい。以上のように融資を受けることには大きなリスクが伴うため、M村の債務者たちが収入の増加だけを目的として融資のリスクを受け入れているとは考えにくい。

したがって、単純に収入が増えるかどうかに限らず、融資によって得られるほかの側面にも目をむける必要がある。ほかの側面とは、女性たちの評価する、まとまった資金としての役割である。女性たちは土地や住居といった財産を得たことや、まとまった資金を得たことで生活の不安定さが取り除かれることを、融資を受けていることの効果として重視している。このような側面が重視される理由は、マイクロクレジットが現れるまで多くの債務者世帯には融資を受けるという選択肢そのものがなかったという背景に由来する。そして、いざというときに頼れる財産もなく、日常の収入も不安定という生活状況をふまえると、マイクロクレジットによる融資が生活の安全保障として機能し家計の安心感に与える影響は決して小さなものではない。

M村の事例において、マイクロクレジット形式の融資による女性の生活への影響には、従来の研究に指摘があるとおり、家庭全体の経済的な向上とそのような向上によって女性の生活に影響する波及効果の2つの側面が確認された。世帯男性による返済や融資を日常生活資金として使うなど想定された資金運用がされていないためか、M村では資金を元手に事業を起こし大きな利益を上げるといった事例は見られなかった。このような状況もあり、女性の生活に対する影響も女性の行動規範を大きく変えるようなものではなく、生活上の身近なことがらに集中した。一方で女性たちが自らの人生のなかにマイクロクレジットを位置づけた要因は、まとまった資金を獲得したという出来事にあった。この出来事を重視する背景には、農村社会におけるまとまった資金を調達することの難しさや、不安定な収入状況が深く影響している。このような背景のもと、女性たちが自分の存在によって融資を獲得したことは人生のなかでの一つの転機として印象づけられているのである。

6. おわりに

本稿では、融資が男性のコントロール下にある場合、融資は女性の生活にどのような影響を及ぼしうるかという視点で考察を行った。M. ユヌスの理念では債務者である女性自身によって融資が管理されることが重視されている。しかし、バングラデシュの農村における女性の行動範囲、資源や市場へのアクセスを考慮すると、女性による資金の管理が現実的ではない場合も少なくない。このように融資が男性のコントロール下にある場合は女性の経済的自立といった効果は現れないものの、融資の存在は家庭内における女性の地位に変化を与えていることがわかった。

女性に管理権がなくとも融資の存在は肯定的に捉えられ、家計に対する効果は認められている。たとえ融資としての機能を発揮できなくとも、女性は「まとまった資金を獲得した」ことの価値を評価する。マイクロクレジットによる融資は延滞することなく返済すれば翌年度も手にすることのできる資金である。収入の不安定な世帯で

はまとまった資金の存在によって生活にある種の安心感を得ている場合も多い。高い利子と重い返済義務にもかかわらず融資を受ける世帯が存在するのは、マイクロクレジット以外にはまとまった資金を得る手段がないことに加え、余剰資金を獲得しておくことは利子と返済のリスクを背負うことよりも価値があると判断されているからであろう。つまりM村の分析を見る限り、マイクロクレジットは不安定な収入と経済資源の貧弱さに対する経済力の低い世帯のとる一つの適応戦略的資源として利用されているといえる。したがって、女性の属する家庭環境を踏まえると、融資が経済的にどんな効果を発揮したかということに限らず、融資が家庭に入ってきたことそのものが一つの転換期として女性の生活に影響を与えていたのである。

謝辞

この研究は時には長時間にわたるインタビューに答えてくれたM村の女性たちの協力なしには完成しなかった。この場をかりて厚く御礼申し上げる。

この研究の一部は文部科学省科学研究費（代表：谷正和）の助成を受けて行われた。

注

[1] 2006年8月時点での為替ルートは1タカ＝1.68円

参考文献

有川　志野　(2001)「マイクロクレジットが「女性に対する暴力」に与える影響についての考察　－バングラデシュ農村の経験から－」『アジア女性研究』　第10号pp.1－5.

筒井　康美　(2003)『マイクロクレジットによる女性のエンパワーメントの有効性と可能性に関する研究　－バングラデシュ・マルア村での事例分析－』　九州芸術工科大学大学院　修士論文

日本リザルツ・編　(1997)『マイクロクレジット・サミット　報告書』

ユヌス,モハマド著、猪熊弘子訳　(1998)『モハマド・ユヌス自伝　貧困なき世界をめざす銀行家』　早川書房

吉野　馨子　(1995)「バングラデシュのバリ・ビティ（屋敷地）を通してみた農村開発」　『東南アジア研究』　33巻1号

Farashuddin, F., Hossain, A., Akter, S., & Banu, D. (1998) Chapter Seven : Empowerment of Women. In A. M. Muazzam Husain (ed.), *Poverty and Alleviation and Empowerment: The Second Impact Assessment Study of BRAC's Rural Development Programe*, BRAC Research and Evaluation Division, Dhaka, pp.111-137.

Goetz, A. M., and Gupta, R. S. (1994) Who Takes the Credit? Gender, Power, and Control Over Loan Use in Rural Credit Programmes in Bangladesh. *World Development* 24(1), pp.45-63.

Yunus, M. (2006) *Grammen Bank At A Glance*, http://www.grameen-info.org/bank/GBGlance.htm

Hashemi, S. M., Schuler, S. R. & Ripley, A. P. (1996a) Rural Credit Programs and Woman's Empowerment in Bangladesh. *World Development* 24(4), pp.635-653.

Hashemi, S. M., Schuler. S. R., Riley, A. P. & Akter, S. (1996b) Credit Programs Patriarchy, and Men's Violence Against Women in Rural Bangladesh. *Social Science and Medicine* 43(12), pp.1729-1742.

Kabeer, N. (2001) Conflicts over credit: Re-evaluating the empowerment potential of loans to women in rural Bangladesh. *World Development* 29(1), pp.63-84.

Koening, A. M., Ahmed, S., Hossain, M. B., and Mozumder, A. B. M. K. A. (2003) Women's Status and Domestic Violence in Rural Bangladesh: Individual and Community-Level Effects. *Demography* 40(2), pp.269-288.

Mandelbaum, D. G. (1988) *Women's Seculusion and Men's Honor: Sex Roles in North India, Bangladesh, and Pakistan.* The University of Arizona Press, Tucson.

Rahman, A. (1999) Micro-credit Initiatives for Equitable and Sustainable Development: Who pays? *World Development* 27(1) pp.67-82.

Rahman, R. I. (1986) *Impact of the Grameen Bank on the situation of poor rural women.* BIDS Working Paper No.1, Grameen Bank Evaluation Project, Bangladesh Institute of Development Studies, Dhaka.

Tassel, E. V. (2004) Household bargaining and microfinance, *Journal of Development Economics* 74(2), pp.449-468.